



《 東京オリンピックに寄せて① 》

国立代々木競技場

1964 東京

戦後を乗り越え、日本が高度成長期に突入したときのエポックメイキングが東京オリンピックだとしたら、その偉業を今に伝える建物が国立代々木競技場だ。副社長の木村は言う。「設計にあたり丹下健三は、建築物としてのダイナミズムはもちろんですが、それ以上にこだわったのが一体感でした。選手のパフォーマンス、観客の応援、それが一つになったときに、祭典にふさわしい素晴らしい空間が生まれると考えたのです。では、それにふさわしい建物はどのようなものか？丹下健三の結論は、選手と観客を一体にするように包み込む無柱空間でした。オリンピック開催時は、何千何万の人が出入りします。その流動性を確保することも重要なテーマだったのですが、入り口と出口をずらすことにより出入りがスムーズになり、人の流れを生み出すという機能性も併せもつこともめざしたのです。」



一体感とは、その一瞬に、選手も観客もすべての人が熱中することだ。一体感を追求した建物の場合、それに水を差すものは不要になる。木村はこう続ける。「柱の存在も一体感の妨げになると丹下健三は考え、導き出した回答が屋根を吊り構造にする設計。引っ張る力により屋根を吊り、大空間を実現するものです。橋などの設計では一般的なものでしたが、施設、それもこれほど巨大な大空間の屋根を吊り上げる建築物はどこにもありませんでした。丹下健三はやる気満々だったそうですが、当時のスタッフは初めてづくしのことなので、かなり勇気のいる挑戦だったと言っていました。」

手本となるものが、世界のどこにもない建築構造への挑戦。しかし、スタッフが勇気のいる挑戦だったと思った理由はそれだけではなかった。工期が150日ほどしかなかったのだ。木村は当時のことをこう言う。「現代なら絶対実現できない工期です。しかし、設計は丹下健三が考えに考えてこれしかないと言ったものです。スタッフも、施工会社の方も、寝る間を惜しんで取り組んだといいます。その年の大晦日、『紅白歌合戦』のあとの『ゆく年くる年』で、あそこだけは工事を行っていますと放送したほど。また、施工中は、経験したことのない数多くの問題に遭遇したと聞いています。立ち足はだかる問題に対峙し、乗り越えることができたのは、丹下健三もそうだし、スタッフも、施工会社の方もそうだったと思うのですが、何とかして東京オリンピックを成功させるんだという熱い思いがすべての人にあつたからでしょう。プランニング、デザインの段階から、施工、完成へいたるまで、そんな一体感ができていたのです。」

